日野原重明記念
「新老人の会」東京 会報
Keep on going!

Vol.8/No.3
2026.7

アナザーストーリー・覚え書
「初めての句会」最終章に代えて

日野原重明記念「新老人の会」東京　世話人
「初めての俳句」講師
沼田　祥子（飛鳥　蘭）

一九五九年、二人の少年にひとつの出会いがありました。のちに私の夫となる沼田邦夫と日野原重明（以下先生と表記）氏のご長男の日野原明夫さんは中学二年時にクラスメイトになり、ここから生涯の友としての付き合いが始まりました。この二人の出会いが無ければ、私が先生と、ましてや「新老人の会」に繋がる事は無かったかと思うのです。

高校に進学してからは、通学路沿線に日野原邸があることもあり、主人はより足繁く日野原家にお邪魔する事になりました。男子三人の母親である先生の奥様は、息子の友人にも息子同様の優しさと厳しさで接してくださり、よくお叱りも受けたとか。だからこそ居心地よく過ごせる場だったのでしょう。日野原家には海外の来客が多く、そういう方々と食卓を共にしたり、時には讃美歌を合唱したり、そんな経験はサラリーマン家庭の一人っ子であった主人には、大きなカルチャーショックだったに違いありません。

一九六九年、大学卒業を前にして、主人は米国旅行を計画しました。主な宿はＹＭＣＡやＢ＆Ｂ、一ドルが三六〇円、持ち出せる金額も限られた時代の話です。そんな時に先生が全米各地のご友人宅を紹介してくださったのです。ドクター日野原の知人ということで、どこのお宅でもファミリーとして温かく受け入れていただいたそうです。社会に出る直前のこの経験もまた、大きな学びと自信になった、と何度も感謝を口にしていました。

日野原明夫さん（右）と
夫・沼田邦夫

その後、縁あって私は沼田姓に。結婚当初から出産その他、聖路加国際病院には何かとお世話になりました。

子育てに一段落ついた頃、海外赴任中の明夫さんの帰国時に合わせて、数組の仲間夫婦が田園調布の日野原邸に集いました。そんな折、仕事から戻られた先生が私たちの輪に加わる事がままありました。当時生活習慣病の提唱をはじめ医学会のみならず社会的にも多くの業績を重ねていらした先生が、ただのひとりの父親として、我々の稚拙な話題に仲間入りしてくださったのです。気づくといつも女性陣の真中に座っていらっしゃる。「朝はワンスプーンのオリーブオイルとレシチンを常飲しています。でもメーカーの名前は教えませんよ、宣伝になっちゃうからね」とちゃめっ気たっぷりに仰るのです。

私が一番驚いたのは先生の読書の量と質です。古今東西を網羅して、文学部教授顔負けのレベルを感じました。私が俳句を始めた時、唯一応援の言葉を掛けてくださったのは先生でした。その後はお会いする度に「俳句は続けていますか」とお尋ねくださるようになり、二〇〇九年私の句集の帯に身に余る一文を賜りました。そのお礼に伺った際、「新老人の会」のメンバーになって、会員の方々に俳句の楽しさを広めてください、というご提案をいただいたのです。

二〇一七年三月、明夫さんから、先生の体調が思わしくなく、自宅で過ごしたいという本人の強い希望で退院したが、現在病院の方々といざという時の段取り等を相談している旨のメールが、闘病中の主人にもたらされました。

同年七月十八日、日野原重明氏逝去のニュースは広く報道され、皇室の弔問を受ける明夫さんの姿を、病室のテレビで見た主人も、その三ヶ月後、帰らぬ人となりました。相次いで父上と親友を亡くした明夫さんも、昨年八月に天国へ召されました。友情はあの世へと引き継がれたのです。

日野原先生の掲げられた灯を直ぐに消してはならない、と発足した「新老人の会」東京のサークル活動として俳句講座開設、会報誌に俳句欄の掲載が叶った事を、いずれ天国の先生に直接ご報告したいと願っています。

飛鳥蘭プロフィール

1969年　慶應義塾大学文学部卒業
1991年　俳句結社「畦」主宰上田五千石に入門

「初めての俳句」開催中
毎月　第３火曜13：00
武蔵野プレイス（武蔵境駅 南口）
連絡先：viridia@icloud.com
TEL03-3265-1909

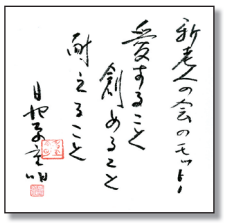
報告

映画『失われた時の中で』上映と坂田雅子監督の講演会

演題：―ベトナム戦争終結から五十年―「枯葉剤の傷跡を見つめ続けた私の二十年」

二〇二六年五月三十日㈯　13時30分～15時30分
城西国際大学・紀尾井町キャンパス地下ホール　参加者81人

講演中の坂田雅子監督



映画『失われた時の中で』上映に続いて、標記のテーマで坂田監督の講演をお聴きしました。要約して報告させていただきます。

・夫を亡くして

私は、五十五歳にして、初めて映画を撮ることになりました。フォトジャーナリストとして、アジア各地を飛び回って取材していた夫グレッグ・デイビスは、体調が悪くなり入院して二週間で、肝臓がんで亡くなってしまいました。あまりに急なことで呆然としていた私に、夫の取材仲間でベテランのフォトジャーナリストのフィリップが、「グレッグの病気の原因は、枯葉剤に違いない」と。夫は、十八歳でベトナム戦争にアメリカ兵として従軍し、帰還後、自由を求めて日本にやってきて、私たちは出会いました。

三十三年間、連れ添った夫の死は、深い悲しみと喪失感で、これから何を支えに生きていったらよいのかと模索するなかで、枯葉剤についての資料を集めて勉強しました。そして、それについてドキュメンタリーを作ろうと思い立ちました。

そんな時、高校時代に留学していた米国ニューイングランドの小さな町で、二週間のドキュメンタリー映画作りのワークショップがあることを知り、参加することにしました。そこで、カメラやコンピューターの扱いの初歩を学び、映画はこうやってできるのだと知りました。

・カメラを担いでベトナムへ

帰国して、ソニーのビデオカメラを買い、二〇〇四年の夏、枯葉剤被害の写真集を作ろうとしていたフィリップに同行してもらい、ベトナムに取材に訪れました。

ベトナムは戦後三十年経っており、目覚ましい復興の中にありました。政府の方針も、枯葉剤の被害を世界に知ってほしいという時期と重なり、会った人々がみな協力的でした。

枯葉剤の被害者は、農村でも都会でもいたるところにいて、それぞれの家族の悲惨な様子に圧倒されました。貧しく悲惨ななかでも労わり合う家族愛に癒やされ、私の心は徐々に慰められていきました。悲しいのは私だけではない。静かに運命を受け入れ、支え合って生きる人々に勇気を与えられました。

・ツーズー病院で出会った人たち

訪れたツーズー病院は、ハノイ最大の産婦人科病院です。そこで出会ったフォン先生は、一九六五年～六九年に研修医として働いていたころに異常出産が急増し、驚かされたそうです。以来、六十年以上にわたり枯葉剤の研究と被害者の救済に尽力しておられます。私に、枯葉剤についていろいろと教えてくださった、私が最も尊敬する女性のひとりです。

その中の平和村は、さまざまな障害を持った子どもたち百人くらいが収容されている施設で、フォン先生や病院スタッフに支えられて、目をそむけたくなるような重い障害をもった子どもたちが暮らしていました。日本で知られるようになったのは結合双生児のベトちゃん・ドクちゃんからでしょうか。

・映画『花はどこへいった』が完成

こうして、ゼロから始めた私の映画作りは、『花はどこへいった』という作品になりましたが、これは、私の心からの叫びでした。出会った彼らや家族たちが語ってくれたことが一つのストーリーになりました。幸運なことに国内外で一般公開され、いくつかの映画賞をいただき、多くの方々に見ていただくことができました。

そのころ、インターネットで情報を得られるようになり、障害を持って生まれたベトナム帰還兵の子どものグループを知りました。ベトナムとアメリカの第二世代の枯葉剤の被害者です。この話は、アメリカでも見てもらう必要がある。まだまだ語り足りないと思いました。

その頃、二〇一〇年のNHK・ETV特集『枯葉剤の傷痕をみつめて』の取材で、ベトナムとアメリカを訪れることになり、障害を持つヘザーと出会いました。これらをもとに、二作目の映画『沈黙の春を生きて』を制作しました。

・「希望の種奨学金」

ベトナムには、何度も訪れましたが、時々取材に行くだけでは実態が掴めず、二〇一〇年に一年間住んでみることにしました。ベトナムの社会や人々について、より深く、幅広く知る機会となりました。枯葉剤の被害は、国境を越えて、世代を超えて各地に蔓延しています。

障害が軽い子どもたちは、少しの援助で学校に通い、職を身につけ、自立して生活できることを知り、「希望の種奨学金」の設立を思い立ちました。これが縁で、その後もベトナム訪問を続け、今に続く被害の様子を記録することになりました。これまでに、二千万円くらい集まり、二百人くらいの子どもたちを支援することができました。

・戦後五十年を迎えたベトナム

五十年を機に、私のこれまでの枯葉剤被害の活動を振り返ってみようというNHKの企画は、私にとって大変嬉しい提案でした。十五年前のETV特集の時と同じディレクターと共に、ベトナム、アメリカを旅しました。

これまでの取り組みを客観的に振り返り、事実の検証や確認、新たな証言を聞くことができました。枯葉剤が最初に散布されてから六十五年、被害者の方々が過ごした年月の重さ、傷はまだまだ生々しく残っています。今は、第四世代の被害者も出ていて、枯葉剤がもたらした悲劇は語り継がなければなりません。

・終わりに

この二十余年の経験から、私たちは否応

なく、歴史、社会、政治と繋がっているのだと思います。私たち同士もまた繋がっているからこそ生きていく意味があるのです。戦争や破壊が絶えない、大きな悪が蔓延する中で、私たちに何ができるのだろうと、諦めたくなりますが、目の前の一歩を踏み出せば、何かが変わるかも知れないのです。

私が最近、心の糧としている「Empathy（共感）」という言葉は、それ以上の深い意味を感じます。それは「思いやり」、人の心の中に入って行くことだろうと思います。

「人間にとって、お互いが存在するということに気づいた時、大きな力が湧いてくるのではないでしょうか。この希望の種は、大切に育てなければならない。なぜならば、それはとても壊れやすいものだから」と。最後に『花はどこへいった』のナレーションを引用して終わりました。

坂田雅子監督プロフィール

ドキュメンタリー映画監督。1948年、長野県生まれ。AFS交換留学生として米国メイン州の高校に学ぶ。帰国後、京都大学在学中にグレッグ・デイビスと出会う。1976～2008年まで写真通信社に勤務および経営。映画制作に『花はどこへいった』（2007年）『沈黙の春を生きて』（2011年）『わたしの、終わらない旅』（2014年）『モルゲン、明日』（2018年）『失われた時の中で』（2022年）。毎日ドキュメンタリー賞、パリ国際環境映画祭特別賞、アースビジョン審査員賞、文化庁映画賞など数々の賞を受賞。

坂田雅子監督講演会に参加して

大室　章（埼玉　75歳）

ベトナム戦争が終結してから五十年。未だ消し切れない悲劇を感じました。

夫・デイビス氏の急逝をきっかけに、枯葉剤の映画撮影を決意。初めてドキュメンタリー映像のワークショップに参加しビデオカメラを購入したという坂田監督の行動力に感動。その後ベトナムに渡り枯葉剤を原因とする障害児、その家族、病院・医師たちと出会い、つらい現実と向き合いながら取材を続けるなかで、ロイ君は結婚し家族を持ち、ホアンさんも自立した生活を楽しんでいるとのこと。障害を持ちながらも明るく生きる人たちの表情に、私も勇気と希望を感じました。

講演は、ベトナム兵だけでなく米国の帰還兵にも多くの犠牲者がPTSD等を発症、原因究明や被害者訴訟での不誠実、歴史・政治・社会で苦悩するなかで「時代を超え国境を越えて、Empathy（共感）お互いの思いやりが生まれる」と結ばれました。

参加した友人たちも「最近は残酷な場面を見たくなく枯葉剤の特集は避けていたので良い機会になった」（五十代女性）「枯葉剤散布など愚かなことを繰り返さないために今回のイベントのような地道な情報提供が大事」（六十代男性）と。そして二人とも「障害があっても前向きに生きている子供たちの姿が救いだった」と話します。障害者の弟がいた私も同じ思いです。

初心者のためのスマホ講座⑬

デジタル庁デジタル推進委員
伴　克子（東京会員 福岡在住）

こんにちは～。みなさん、お元気ですか？デジタル庁デジタル推進委員の伴　克子です。

昨年の７月号で「スマホでできる防災」について書きました。覚えていますか？改めてお聞きしますね。あの時のチェックリストにチェックは入りましたか？忘れますよね。でも大丈夫！今月はおさらいです。

地震、大雨、台風。最近は「今までに経験したことのない」という言葉をニュースで聞くことも増えました。その度に「防災」のことも頭に浮かびます。防災というと、「ちゃんと準備しなきゃ」「難しそう」と感じてしまう方もいらっしゃるかもしれません。でも、防災で一番大切なのは、「たくさん知っている」ではなく「一度やってみたことがある」だと私は思っています。

いざという時、人は初めての操作に戸惑います。パニックになる。容易に想像できますよね。だからこそ、防災は“特別なこと”ではなく、普段の生活の中で慣れておくことが大切です。

まずは、スマホのライト。

停電の時、とても頼りになります。でも、「どこを押したらライトがつくかわからない」という方も少なくありません。一度つけてみるだけで、安心感はずいぶん違います。つけてみるとその明るさにびっくりですよ。

LINEの位置情報を送る。

「今ここにいるよ」が送れるだけで、家族は安心します。実際にやってみると、「意外と簡単だった！」という声をよく聞きます。先日の公民館のスマホ講座でも実際に送ることをしました。みんなで一緒にすると安心しますね。

防災アプリも、“入れて終わり”になりがちです。

通知は届いていますか？音は聞こえますか？どんな情報が届くのか、一度確認しておくと安心です。

そして、防災でとても大切なのが「つながり」です。一人で全部覚えようとしなくて大丈夫。ご家族やお友達と「こういう時どうする？」と話しておくだけでも、大きな備えになります。１年ぶりにチェックしてみましょう。

【スマホ防災チェックリスト】

- □ スマホのライトを一度つけてみた
- □ LINEで位置情報を送る練習をした
- □ 防災アプリの通知を確認した
- □ 家族の連絡先をすぐ出せるようにした
- □ モバイルバッテリーを準備してある
- □ ハザードマップを見たことがある

もしものために、今日ちょっとだけ。そんな気持ちで、スマホ防災を暮らしの中に取り入れてみませんか。

イベント報告

はとバスツアー東京花見会

三月二十六日㈭東京駅南口に集合。はとバスに乗り、お花見ツアーに出かけました。あいにくの曇り空でしたが、北は福島、南は浜松・横浜から、総勢二十一名の皆さんと小石川後楽園や六義園に咲き誇る枝垂れ桜や飛鳥山公園の桜を愛でました。

はとバス移動のお陰で、車中ではお隣さんたちと楽しく話もできました。広い公園の中での桜鑑賞なので歩く距離はなかなかのものでしたが、九十歳を超えた方をはじめ、皆さんご自分のペースで公園内を巡られ集合時間にも遅れることなく揃われたのには、さすが「新老人の会」！と感心させられました。

昼食は、座席に運ばれてくるコース料理を堪能。同席の皆さんがここでも楽しそうに話されていたのを見てこの時間もまた大切な思い出の一つと感じました。

飛鳥山公園には、日本橋界隈を散策した際に「日本の経済の基礎を固め、近代化に寄与された」と学んだ澁澤榮一氏の自邸もあり、桜以外にも見所満載の散策となりました。

AIで青空に!!

日野原重明記念「新老人の会」全国連絡会・鹿児島集会のご案内

日時：2026年10月24日（土）～25日（日）
会場：南国ライカビル５階会議室 ／ マリンパレスかごしま

24日㈯

〇プログラム：13:00 ～ 17:00
・DVD上映「語り継ぐ戦争・知られざる世界」 大分表現塾作成
・円卓会議

― マリンパレスかごしまへバスにて移動 ―

〇懇親会：18:30 ～ 20:30 ／ 〇宿泊：
〇経　費：懇親会＋宿泊＝19,850円

25日㈰

〇鹿児島観光：①知覧・指宿コース ②桜島・垂水・福山コース ③鹿児島市内コース
・中型タクシー（4人乗り）／ ジャンボタクシー（9人乗り）
・ホテル9:00出発 → 鹿児島空港16:00着（タクシー代を利用人数で割るシステムです）

日野原重明記念「新老人の会」全国連絡会　鹿児島集会

日　時：　2026年10月24日（土）１３時より
会　場：　南国ライカビル5階・会議室　／　マリンパレス鹿児島

マリンパレス鹿児島

おすすめ

会員の「新老人の会」各会から参加し、共に学び、意見交換、交流を図ります。
この機会に鹿児島観光も参加の皆様とご一緒に楽しみませんか？
多くの皆様のご参加をお待ちしています。

10 月 24 日(土)プログラム

●13:00～14:00　DVD「語り継ぐ戦争・知られざる世界」上映
●14:45～17:00　円卓会議（全国各会から参加、意見交換・交流を図ります）

―マリンパレス鹿児島へバスにて移動―

●18:30～20:30　夕食交流会　―宿　泊―

10 月 25 日(日)
9:00～16:00　鹿児島観光

① 知覧・指宿コース ②桜島・垂水・福山コース ③鹿児島市内コース
中型タクシー（4人乗り）、ジャンボタクシー（9人乗り）
○ご希望のコースを指定してください。タクシー代を人数で割るシステムです。

申し込み方法

★ Eメール・ハガキ　：　氏名、電話番号 、「鹿児島集会に参加」と書いて送信・お送りください。
★ 鹿児島観光の希望　：　①、②、③のやから選んで記入）
★ 申し込み締め切り　：　8月31日（火）
★ あて先：　〒102-0082　東京都千代田区一番町29-2　進興ビル4階　「新老人の会」東京
電　話：　03-3265-1909　（転送電話・お問い合わせのみ）

日野原重明記念「新老人の会」全国連絡会は、「新老人の会」の趣旨を継承し、同じ志をもって活動している全国の各会が、緩やかな連携をもって活動し、交流を図っていくことを目的に2020年に発足しました。代表に熊本の小山和作氏、副代表に大阪の三木哲郎氏、事務局を東京の石清水由紀子が担うことになりました。

この間、コロナ禍がありましたので、’22年は大阪の三木先生の主導でZoom会議をしましたが、やはり、集会を開催してほしいとの声が上がり、’23年は東京集会、そして、’24年は松本集会、昨年の’25年は再び東京集会と、4年続けることができました。今回は、鹿児島「新老人の会」のご好意により、熊本「新老人の会」と合同で開催していただくことになりました。

振り返れば「新老人の会」は、2000年の発足から26年、4半世紀を超えて活動を続けてきました。まさに継続は力なりです。このことは、日野原先生が提唱された「新老人運動」の趣旨が、皆さんの生き方に影響を与え、前向きに生きる原動力になっているのではないでしょうか。今回の鹿児島集会では、日野原先生から学んだことを、皆さんと分かち合う機会になればと思います。

首都圏から鹿児島までは、旅費はかかりますが、25日は鹿児島観光に当てられます。この機会に、思い切って参加されませんか？会員同士の有意義で楽しい旅になることと思います。詳細は、同封のチラシをご覧ください。

’25年　東京集会で

「新老人の会」東京

2026年（6月現在）会員数124人（143件）
2025年　会員数156人（144件）

会員募集中！

年 会 費

個人・家族会員	5,000円
賛助会員　（一口）	10,000円

編 集 後 記

7月18日は、日野原先生の9回目の命日です。巻頭言は、先生とご親交があった沼田祥子さんにお願いしました。皆様も、先生の記憶を思い起こしてお偲びいただければと思います。

5月30日の坂田雅子監督の映画上映と講演の会は、多くの示唆に富む深い内容のものでした。なるべく丁寧にご報告したいと、文字が詰まった誌面になりましたが、お読みいただければと思います。参加されなかった皆様には、坂田監督が、20年にわたりベトナムの枯葉剤被害に取り組まれた集大成としてのご著書を、おすすめいたします。

■発行所　日野原重明記念「新老人の会」東京　〒102-0082 東京都千代田区一番町29-2 進興ビル４階　電話・FAX：03-3265-1909
Eメール：t.shinrojin@gmail.com　ホームページアカウント：https://shinrojin.com/　■発行人 石清水由紀子　■編集責任者 五百木幸子　■印刷 佐川印刷株式会社